

## 平成23年度 家畜管理研究会・北海道草地研究会 現地研究会への参加報告

新 宮 裕 子 (道総研上川農業試験場天北支場)

平成23年9月6日～9月7日の2日間、「乳用育成牛の預託システムにおける草地管理と育成技術」をテーマに家畜管理研究会・北海道草地研究会合同の現地研究会が開催された。本年度の現地研究会は、平成22年に行われたシンポジウム「公共牧場を再考する - 過去・現在・未来 -」を受け、十勝管内の3町（足寄町、豊頃町、浦幌町）において公共育成牧場2カ所、哺育育成牧場1カ所の見学を行った。数日前からの大雨の影響で、参加者の誰もが「今日は、本当に開催するのか？」と不安に思っていたが、結局、開始時刻を遅らせての開催となった。大学や試験場などの試験研究機関、農協、民間企業から当初の予定人数より5名減の37名が参加した。

### 日 程

9月6日 (火)

足寄町大規模草地育成牧場見学（足寄町；預託育成）

2011年度第1回総会・「はにうの宿」泊

9月7日 (水)

シー・ブライト（豊頃町；預託哺育）

浦幌町模範牧場（浦幌町；預託哺育・育成）

### 1. 足寄町大規模草地育成牧場（足寄町）

雨のため管理事務所内で担当者から牧場の概要について説明が行われた。足寄町大規模草地育成牧場は、国営草地開発事業による草地整備で昭和48年から公共牧場として開設され、平成18年から足寄町の農協が管理運営を行っている。現在、乳肉用牛の育成牛および馬を合わせて約1700頭を預かっている。町内および本別町からの受け入れ

が全体の約50%を占めているが、鳥取県や京都府など府県からの受け入れも20%弱を占める。育成牛の受け入れは6カ月齢以降からであり、人工授精または受精卵移植による交配を行い、分娩前2ヵ月で各農家へ牛を返す。授精開始時期や種雄の種類などは、基本的には農家の要望に合わせるが、特に育成牛の発育が遅れている場合には、授精開始を遅らせるなどの配慮を行い、最終的な受胎率は98%である。

見学者から今後、哺育からの育成を行う予定があるのかとの質問があった。農家からの希望はあるものの、現段階では哺育牛に対応できるスタッフがいないため実施しないとの回答であった。また、哺育預託を行うとしても、設備の充実よりもスタッフの育成が重要であると考えている。

その後、A団地へ移動し、放牧地を見学した。放牧地は大きくA～Dの4つの団地に分かれ、面積が3～13haの90の牧区に分かれている。牛群は肉用牛、乳用牛の若牛、人工授精を行う牛、妊娠牛などに分けており、1群を約70～250頭として、草量に応じて滞牧日数を1～4日とする輪換放牧を行っている。放牧開始月齢は6カ月齢以降としている。



写真1 A団地の放牧地の様子

が、体格が小さい育成牛を放牧すると発育が悪くなる場合があるため、牛舎内で成長させてから放牧を開始している。雨のため放牧地内には入らなかったが、いずれの放牧地も山の斜面を造成しており、急傾斜地が多かった。そのため、各牧区には水槽を設置しているが、今後の課題として水の確保が挙げられた。

## 2. シー・ブライト（豊頃町）

シー・ブライトは、今年1月から営業を開始した。生後3日齢から10カ月齢までの育成牛の預託を行う新規の哺育育成牧場である。15戸の農家から委託を受けており、見学時の時点で哺育・育成を合わせて450頭のホルスタイン種牛を飼育していた。



写真2 施設の正面

各農家から集められてきた子牛は、2週間は導入舎で飼育され体重測定やサルモネラ検査などを行い、哺乳舎へ移動する。哺乳舎では哺乳ロボット4台を導入し、1日4～6Lの哺乳を行うと同時に1番草の乾草を自由採食させる。冬は寒いため、粉ミルクの濃度を濃くして、発育が停滞しないよう調整している。45日齢から離乳舎へ移し離乳を開始し、75～80日齢までの間は、配合飼料、サイレージおよびアルファルファ乾草を給与する。離乳後からは、育成舎へ移動し預託期間が終了するまで配合飼料を2.5～3kg/頭給与し、1または2番草

サイレージを自由採食させている。乾草やサイレージは、自社で調製したものを使用していた。

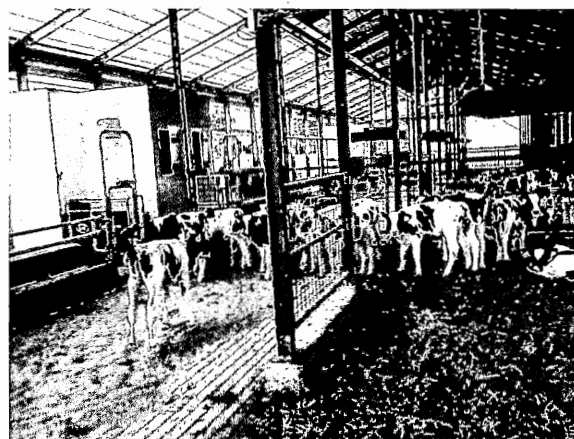


写真3 哺乳舎内の哺育牛（左の白い施設が哺乳ロボット）



写真4 哺乳舎で説明を聞く参加者



写真5 育成舎内の育成牛

見学は、防疫のため導入舎、哺乳舎、離乳舎、育成舎の順に行われ、参加者は熱心に舎内の構造や子牛の状態を見学していた。哺乳舎を見学中、通常は1頭しか入れない哺乳ロボットに2頭同時に入っている光景を見かけた。1日の哺乳量を超えてもまだ飲み足りないようで、他の子牛がミルクを飲もうとするのを横から横取りしようとしていた。

### 3. 浦幌町模範牧場

浦幌町模範牧場では、0～6カ月齢までの乳用哺育牛約80頭、乳用育成牛および肉用繁殖牛約730頭の預託を行っている。夏期間は放牧を行い、6カ月齢から乾草やサイレージを併給しながら放牧馴致し、10カ月齢以降は放牧のみの飼養となる。草地面積は314haあり、そのうち136haは採草地として利用し、178haを放牧地とし、平成7年から集約放牧を行っている。

見学は、海に近い高台にある放牧地と採草地で行われた。施肥についての説明があり、採草地および放牧地ともに土壌診断を行い、診断結果に基づいて、必要な成分だけを施肥する。化学肥料はほとんど利用せず、堆肥を中心に、リン酸、炭カルおよび微量元素の散布をしている。特に堆肥にはこだわりがあり、臭いのない完熟堆肥を肥料として利用している。

放牧地および採草地の草種を見て歩いたが、どちらの草地も雑草はあまりなく、シロクローバが多く、オーチャードグラスやチモシーなどのイネ科牧草が見られた。採草地は、2番草を刈る前であったが、シカによる食害がひどく、2番草にしては草丈が短く、収量が少ないように思った。



写真6 放牧地の草種について語り合う見学者

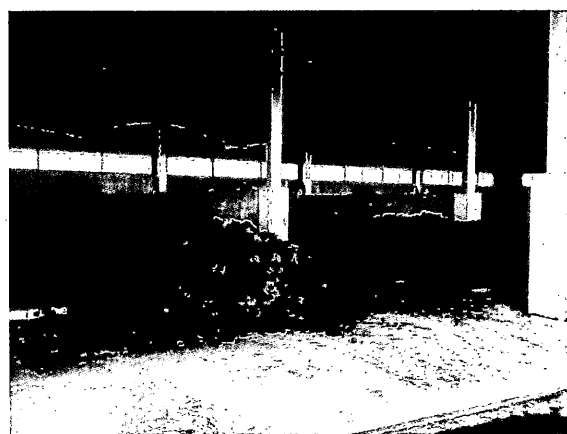


写真7 堆肥舎（臭いのしない完熟堆肥を肥料として利用）